

## 神山町サイン計画

### 「神山町:総合アート・インタラクティブ・プロジェクト」 環境・景観・サインデザインに関する調査・研究とサイン計画の提案

森 旬 子

アートをキーワードとした地域活性化の取組みなど、活発な住民活動が見られる徳島県神山町において、環境・景観・サインデザインに関する調査・研究を実施し、具体的なサイン計画を提案した。風土や伝統や歴史に裏付けられた町の魅力を捉え、現在の問題点を抽出し新たな提案を試みることで、現在まで築かれた町の活動をより発展させ、効果的に支え得るビジュアルコミュニケーションの手法を探る。

キーワード: 地域活性化、環境デザイン、景観デザイン、サイン計画、ビジュアルコミュニケーション

#### 1. はじめに

##### アートプロジェクトの観光資源としての可能性

近年、地域に特化したアートプロジェクトは国内各地で多く見られ、「観光アート」は新しいツーリズムとして注目を集めている。2007年に観光庁が施行した「観光立国推進基本法」では、ニューツーリズムと称される「体験・参加型」旅行の普及、促進が提唱されている。ニューツーリズムは、地域コミュニティに参加し、地域住民とともに行動する要素が含まれる点が特徴的であり、これまでの観光名所を訪れ「見る」「食べる」「遊ぶ」旅行から、「体験する」「交流する」旅行へ、観光のニーズが移行していることを示すものでもある。注1)

特に現代アートの分野では、トリエンナーレ形式で行われる世界最大規模の国際芸術祭「大地の芸術祭(新潟県越後妻有)」や二十数年前に直島から始まり2010年では周囲の島々にまで広がった「瀬戸内国際芸術祭(香川県直島)」などが、地域との連携によるアーティストの作品制作で大きな話題を呼び、その土地、その時期限定で誕生する作品が、地域の魅力を観光資源として押上げている。これらの動きは、観光客の増加を契機に、地域産業の活性化、地域の歴史文化の再評価など、人口流出に悩む地域に新しい変化をもたらすものとして評価されている。

#### 2. 神山町の地域活性化とサイン計画

##### 2-1 神山町アーティスト・イン・レジデンス

神山町アーティスト・イン・レジデンスは、(以下KAIR)『とくしま国際文化村』構想のコアの一つとなる活動で、国内外から招聘したアーティストが、地域住民の協力のもと創作活動に専念できる環境を提供し、ここで得た体験が今後の作家活動に何らかの好影響を及ぼすことと、芸術と呼ばれる分野や、そこに生きる人々との交流に恵まれることの少ない地域住民が、この事業を通じて新しい発見・新しい価値観・新しい交流を享受できることを目的としている。

自然に恵まれ人情味あふれる日本の田舎町・神山に身を置くことによって生まれる「インスピレーション」と、住民との出会いによって生まれる「カルチャーショック」によって紡ぎ出される、創意あふれる作品を期待し、アーティストが、有形無形の「神山(God's Mountain)」に触れ合うことで創作される作品を通して「未知との出会いと交わり」が作家自身に、あるいは神山にどのようなインパクトをもたらすかを探っていく。

徳島県のほぼ中央部に位置し、四国山地の山懷に抱かれた神山町は、古来「大栗の里」と呼ばれ、「栗の国」(阿波国の旧国名)の中心地の一つとして栄え、数多くの文化や民俗芸能などを育んできた。特に、江戸後期から町内各地に点在

した「常(設)舞台」で盛んに上演された人形浄瑠璃はその代表的なもので、この人形浄瑠璃が演じられる際、大道具の一つとして舞台を飾ったのが「襖絵(屏風絵)」で、町内には江戸後期から明治、大正時代にかけて制作された1500枚(日本最多)を超える襖絵が現存し、その鮮やかな色調や豪快な筆致は見る者を圧倒する迫力や躍動感に満ち溢れている。

これらの襖絵は、レジデント・アーティストとして名(集落)に招かれた絵師たちが庄屋や富豪の屋敷に滞在し、地域住民の協力の下、制作されたものとされている。つまり19世紀の半ばには既に神山の地において、アーティスト・イン・レジデンスが盛んに行われていた。

KAIRは、1999年から10年にわたり開催されており、毎年国内外の100名以上におよぶ応募者から選ばれるアーティストが地域を巡り、ワークショップや課外授業を実施、食の交流会などを通して、地域住民とともに生活する中で作品を創りあげる。アーティストが豊かな山林や、昭和初期に建てられた芝居小屋、また学校校舎など、町の至るところに入り込み、住民との交流の中で制作する作品は好評を得て、レジデンス期間は国内外からの来場者も多い。近年ではこの地に移住するアーティストも現れるなど、町とレジデンスは密着し、活動を広げている。

運営は神山町の特定非営利(NPO)法人グリーンバレー(以下グリーンバレー)が中心となった実行委員会形式であり、外部キュレーターを招聘し企画委託を行うことの多いアートイベントとは一線を画している。これには、初期のレジデンスにおいて、招聘学芸員や推薦作家と地域住民との間に生まれた乖離を踏まえ、グリーンバレー関係者が「芸術家の消費物ではないレジデンス」を目指したことが大きな分岐点となっている。現在は、アーティストの選考基準が「神山町の人と一緒に作業をしたいと思うアーティスト」となり、地域住民との積極的な関係が構築されている。

各アーティストには、地域住民から、制作サポーターと生活サポーターが付き、地域でアーティストの生活相談からある程度の制作予算決算までを担い、支えるシステムを取る。この手法は運営側、制作側のストレスを減らすだけでなく、住民にKAIRへの参加意識、当事者としての誇りとやりがいを持たせる効果ももっている。注2)

また、KAIRの母体となっているグリーンバレーは、レジ

デンスから発展した参加型の「森づくり」事業や、過疎と少子高齢化を抱える町の地域課題に対する移住者の確保のため、町が必要とする働き手を募るワーク・イン・レジデンス、空き家再生への取組み、学生インターンシップの受け入れなども実施している。これらの活発な活動は、ウェブサイト「in Kamiyama(イン神山)」を通して、町内外に活動の情報を発信し、その取組みは地域情報サイトの好例として、雑誌でも取り上げられた。注3)

## 2. -2 神山町のサインの現状

森林を含む約170km<sup>2</sup>の神山町は、林業や農業が主力産業であり、観光サービスが発展する環境にはなかった。古くからあるお遍路の要所など、わずかな名所旧跡以外には公共施設の位置案内を含め、サインが非常に少ない。小さな町でもあり、案内サインの必要性を住民自身が感じてこなかった可能性が高いが、外部からの来訪者にとっては、毎年アーティスト・イン・レジデンスで訪れるアーティストらでも、どこに何があるのかを一つ一つ住民に聞かなければならない状況が続いてきた。KAIRは10年を経過する事で作品数が増え、町内にその多くが残っている。しかし、何処に作品が展示されているのかがわかりにくい。また、小規模ながら温泉施設があり(道の駅神山温泉に併設)、美しい自然に恵まれた環境でもあることから、レジデンスの実施期間や花の季節など、お遍路以外にも町外からの来訪者が多い。神山町は住民による密接な交流が残るコミュニティがあり、古くからお遍路に手を差し伸べる文化が残っている。こうした住民の気質から、人的なコミュニケーションによる案内がサインの穴埋めをしてきたことは予測できるが、多くの来訪者にとっての利便性、また町の魅力を伝える機能においては十分な機能を果たせてはいない。

## 3. 「神山町:総合アート・インタラクティブ・プロジェクト」における環境・景観・サインデザインに関する調査・研究とサイン計画の実施

### 3. -1 趣旨

神山町の協力の元、「神山町:総合アート・インタラクティブ・プロジェクト」における環境・景観・サインデザインに関する調査ならびに研究を行い、地域に特化した神山町のサ

イン計画を提案する。ビジュアルコミュニケーション研究の一環として現地リサーチ、プラン構築、地域へのプレゼンテーションを行い、機能性と景観との調和を兼ね備えたサイン計画の提示によって神山町の発展を目指す。

### 3.-2 概要

名称＝「神山町：総合アート・インタラクティブ・プロジェクト」における環境・景観・サインデザインに関する調査・研究とサイン計画の提案

実施期間＝2011年6月～8月

実施形式＝グループ形式

参加学生＝大学院芸術工学研究科森研究室院生3人

芸術工学部森研究室学生3名

[プレゼンテーションと展示]

日時＝2011年8月5日

会場＝徳島県神山町「綿の花」ギャラリー2F

出席者＝グリーンバレー関係者、神山町観光協会・神山町職員、他町民の皆様、神山塾メンバー、武蔵野美術大学インターン学生、KAIL2010招待作家・神山町サイン計画コーディネーター廣田緑、名古屋市立大学大学院芸術工学研究科森研究室院生、芸術工学部森研究室学生、筆者

形式＝参加学生による発表とパネル展示

口頭説明とパネルによるプレゼンテーション

神山町関係者からの質疑応答と交流会

### 3.-3 事業のながれ

2010年冬、KAIL2010招待作家・神山町サイン計画コーディネーター廣田緑氏より森研究室に神山町のサイン計画に関する打診を受ける。2011年4月、現地調査、諸条件の確認と打合せを行い、実施計画のプランニングを行う。同年5月より廣田緑氏、ならびに愛知県立芸術大学名誉教授林英光氏のレクチャーを受けながら、数度のプレストミーティングを実施。コンセプト立案とともに主要サインの分類、制作サインの種別立案、地域情報リサーチを進め、6月の現場リサーチの手法等プランニングを進める。

6月4日～7日にかけて、コーディネーター廣田緑氏、筆者、参加学生で神山町を訪れ、愛知県立芸術大学名誉教授林英光氏、筆者による「環境・景観・サインについて」勉強会とし

て神山町民、グリーンバレー関係者、神山町観光協会・神山町関係者へのレクチャーを開催。(図-1)併せて、町内主要サインの設置ポイント、位置関係、土地の勾配等について現地調査を実施した。グリーンバレー関係者、神山町観光協会関係者、町民にも聞き取り調査を行い、町民のサイン計画に対する認識、ニーズに対するリサーチを実施、提案プランに関するコンセプトとサイン計画についてミーティングを行った。(図-2)(図-3)



図-1 「環境・景観・サインデザインについて」勉強会



図-2 現地調査



図-3 神山町観光協会関係者とのミーティング



神山町郷土資料館にて実際に襖絵も見学し、文献等で風土や歴史の調査をした。現地でのリサーチ後は収集データ、素材を元にプランニング、各アイテムの制作を進め、7月中旬に計画の基本コンセプト、プランニング、サインデザイン、画像データの整備、プレゼンテーションツールを制作。

8月5日 徳島県神山町「綿の花」ギャラリー2Fにおいて神山町関係者に向けてのプレゼンテーションと質疑応答、展示を実施した。(図-4)



図-4 プレゼンテーション／展示

### 3. -4 提案プラン

#### (1) ピクトグラム：神山町オリジナルピクトグラム制作

今回のサイン計画においては、町全体のマップのほか、町内の各所に案内サインを設けることから、文字情報に左右されず、一見して目的の識別が可能なピクトグラム(目的地

や機能を伝えるための絵記号、絵文字)を採用した。神山町ならではの名所旧跡、また来訪者の求める情報は汎用的な既存ピクトグラムでは、対応しきれないことからオリジナルのピクトグラムを制作している。ピクトグラムは大きく2つに分類され、神山町をイメージしたグリーン系単色で展開される目的地のための11種と、(図-5)それぞれの目的地の機能を示すカラフルな5種を設定した。(図-6)目的地のための11種では、公共施設、歴史的建造物、病院、お遍路、滝、温泉、道の駅、広域避難所、花の見どころ、木の見どころ、蛍の里のピクトグラムを制作し、自然豊かでお遍路や蛍の里など、神山ならではの情報に対応している。また、目的地の機能を示すピクトグラムでは、トイレ、駐車場、上り坂、飲食店、宿泊施設について制作し、複数の機能を持つ施設ではこれらを組み合わせることでその機能を示す方法を取っている。また、この中でも上り坂を示すピクトグラムは神山町特有の起伏に富んだ地形を考慮した新しい提案であり、車だけでなく、レンタルサイクル、またお遍路など神山町ならではの交通手段を取る来訪者への配慮から制作された。各ピクトグラムの形状は単純な直線を避け、曲線を用いることで柔らかさを出し、また色の展開は日本の伝統色を採用することで、景観との調和を図っている。これらの色をルール化し、サイン計画の中で使用することで、色だけでも機能を迅速に伝える効果を狙い、神山町の魅力をわかりやすく伝えるサイン計画の一要素とした。



図-5 目的地ピクトグラム



図-6 機能ピクトグラム

## (2) フォント: 神山フォント制作

通常のサイン計画では既存フォント(文字)が使用される事が多いが、今回のサイン計画ではオリジナルフォントを制作、提案した。(図-7)オリジナルフォントの制作は、1.視認性を上げる。2.神山の個性を表現する。という2つの目的からなる。1.の視認性に関しては、神山の交通手段が徒歩だけでなく車やバイクでの来訪者が多いことから、素早く判読できるフォントが求められる。神山フォントは読みやすさを実現するために、まず隣り合った文字同時のバランスを整え、文字の大きさ、線の流れを調整することで文字を一文一文字ではなく、できる限り一塊の言葉として目に入ることを意識している。また、もう一つの工夫として複雑な文字を簡略化し、文字としての形を崩さない範囲で、画数の多い文字の線を1本消す、或は2本の線を1本にまとめるなどの調整がなされている。(図-8)これらの手法は高速道路などのサインに一部導入例があるもので、文字が読めなくな

ることはなく、むしろ見やすさを向上させるものである。

また、2.の神山の個性の表現については、町のあらゆる場面で目にするサイン、そして文字の果たす役割の大きさを考慮し、土地の個性をフォントの中にまで落とし込み、サインの中で統一して使用することで、神山という個性をより強化することを試みている。実際の制作にあたっては、現地調査を通して着目した神山の建設的な姿勢や、伝統を重んじながらも良いもの、新しいものを取り入れる前向きさを制作の場にも反映し、読みやすさと同時に面白さの感じられる形づくりでフォントを制作した。

神山町サイン計画においてはこの神山フォントの他、日本語表記には新ゴシックを、英語表記にはfrutigerフォントを使用し、既存のフォントの中でも神山フォントと相性が良く、読みやすいフォントで構成し、視認性を高めるように心がけている。

焼山寺 旧街道 道の駅 神山温泉  
 蛍の里 創造の森 梅の里 悲願寺  
 上角商店街 菜の花の里 すだちの里  
 雨乙の滝 広域避難所 大久保の里  
 寄井座 神山森林公園 寄井商店街  
 上分花の隠里 農村環境改善センター  
 乳いちよう 桜街道 Kamiyama

図-7 神山フォント

街-街 駅-駅 難-難 滝-滝

図-8 フォントの簡略化(例)



### (3)「イラストレーション」制作

イラストレーションは、写真で示すよりも自由な表現が可能であり、伝えたい情報の強調や、重要でない情報の省略ができるため、イメージを相手に伝えるためには有効である。これらの理由から、名称を見ただけではイメージにくい名所や見どころの魅力を、わかりやすく伝えるため、オリジナルのイラストレーションを制作、合計12の名所を制作しマップの要素として組んだ。(図-9)



図-9 名所イラストレーション

### (4)「案内サイン:神山町全体図」制作

神山町サイン計画において、最も核になる全体図である。この地図を案内板(案内サイン)として神山町内の4箇所に設置する想定をし、神山町の全体像を示すとともに、国道を中心として名所旧跡等、神山町の各見どころへのルートを示した。(図-10) 神山町は国道で南北を分断する特徴的な地形であり、来訪者の流れもこの国道を中心としている。この地形を活かし、サインの設置場所は国道を中心に、徳島方面から来た場合の神山町の入口である鬼籠野(おろの)、また西端に位置する上分(かみぶん)、さらに人が多く集まる道の駅、神山温泉の4箇所に設置する想定をした。



図-10 神山町全体図

神山町の主要な観光名所を載せるほか、公共施設もできる限り掲載し、アーティスト・イン・レジデンス等の活動で海外からの来訪者が頻繁にあることを踏まえ、表記には必要最小限の英語を併記している。名称のほか、分野別のピクトグラムと、その場所の機能を表すピクトグラム(図-6)も表記した。

また、名所以外の様々な神山町の見どころも載せる事で、神山を訪れた人々が地図を見た際に目的地以外の場所へも行ってみたいくなるような工夫もなされている。大久保の里、梅の里、菜の花の里など、神山町には自然に恵まれた美しい景色が随所にあり、さらに、2つの旧街道の古き良き家並みや、そこから起こる町民とのコミュニケーションは神山町ならではの味わいともなっている。温泉や名所だけでなく、多くの方に旧街道にも足を運んでもらい、町民と触れあう機会を設けるため、旧街道についての説明文を加え、また道の色を変えることで新道との区別を図った。

この地図を基にした展開案として、インターネットでの利用を想定した際のマップについても考察、提案を行った。実際に道路上に設置される地図を基本に、インターネットで閲覧する場合は、パソコン上の操作で知りたい情報のみを目立たせるようなシステムを想定している。画面上では基本の全体図の表示から、周辺の拡大図も表示が可能であり、その上で例えば町内の病院など、知りたい情報のピクトグラムをクリックすることによって病院だけを目立たさせ

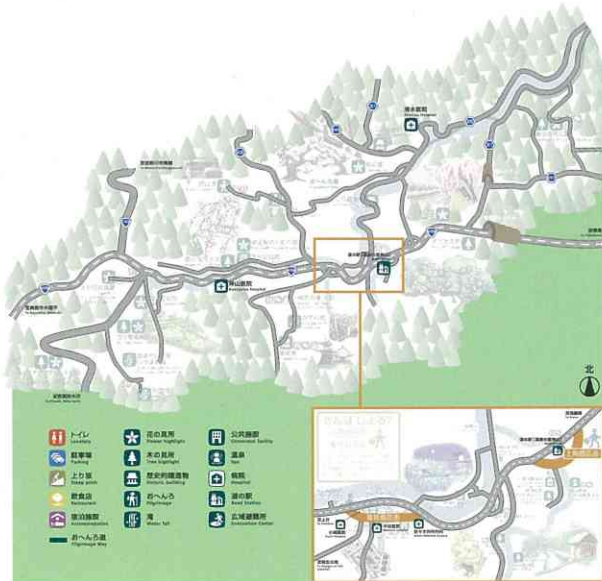


図-11 病院検索(例)

るシステムを提案している。事例として病院のほかに飲食店、宿泊施設、花や木の見どころの4分野でパターンを想定したが、実際には、様々なテーマや組み合わせを増やすなど、ニーズに応じた展開が可能である。(図-11)

#### (5)「誘導サイン」制作

誘導サインは、目的地までの分岐地点に設置されるものである。全てのサインに統一感を持たせ、素材には神山産の青石や木材を使用し、神山町の自然を象徴する深緑を基調とした色を提案した。誘導サインは、青石の上に長方形の木材を積み重ね、それぞれの名所の名称、方向、ピクトグラム、距離を表記している。名称にはすべて神山フォントを使用し、方向が左の場合は中心から左へずらし、右の場合には右へずらすことで進む方向がわかりやすいデザインとなっている。(図-12)



図-12 誘導サイン



下図は鬼籠野の交差点に設置するもので、案内サインも併せて設置することを想定した。(図-13)



図-13 鬼籠野交差点／案内誘導サイン

また、道の駅に置かれる誘導サインは、駐車場の入口向かい側(駐車場を出て正面に見える位置)に設置し、道の駅を起点とする誘導を基本としている。(図-14)

誘導サインでは、名所の誘導に加え、広域避難所の単独誘導サインも併せて制作した。

目的地ごとの誘導サインでは、神山温泉、雨乞の滝、焼山寺、上分花の隠里までの誘導サインすべてに道の駅の方向を記載した。(図-15)全体図同様、道の駅を起点とすることで、統一感を持たせ、迷った場合もルートを通りやすい手法を取っている。(図-16)常に道の駅を起点としたのは、交通

手段を問わずほとんどの人が必ずと言ってもよいほど、道の駅には立ち寄り、何らかの情報を得てから行動をしていること、また町民もコミュニケーションの場として毎日のように利用していて、来訪者と地元の人々との触れ合いの場となっているためである。



図-14 道の駅／誘導サイン



図-15 上分花の隠里への誘導サイン



雨乞の滝、悲願寺への誘導サイン



焼山寺への誘導サイン

図-16 起点を道の駅とする誘導サイン(例)



## (6)「位置サイン」制作

位置サインは、町内の観光名所の入口などに設置するものである。既存のものを使用する場合も多くあるが、今回は全て統一したデザインのものを設置することで、神山町内の名所であることを強調した。英語表記を含む名称、ピクトグラム、さらに名所ごとの由来や魅力などの簡単な解説文を記載し、来訪者にわかりやすく情報を伝えるものとした。

サイン自体のデザインは、誘導サイン同様、青石を土台にし、木材と組み合わせることで統一感を出している。また青石には傾斜をつけて視認性を確保し、その上に木材を貼る仕様を想定した。事例として制作した乳いちよう、雨乞の滝、寄井座、上分花の隠れ里など、いずれも実際に設置する場所は、景観の邪魔にならない場所を想定している。(図-17) (図-18)



図-17 名所位置サイン



図-18 乳いちよう位置サイン

## (7)「見どころサイン」制作

見どころサインは、来訪者に神山町ならではの魅力ある風景を見どころとして紹介するための案内板として制作した。位置サインのように決められた場所ではなく、魅力的な風景が見られる周辺全体の風景を紹介している。現地調査では、既存の地図や案内板では知ることのできなかった美しい場所が多く存在することに気付かされたことから、通常の名所巡りだけでは見逃してしまうこれらの風景を来訪者に知らせるために提案した。梅の里、桜街道、菜の花の里、すだちの里、大久保の里、蛍の里の6カ所を例として制作したが、すだち畑をすだちの里、蛍がたくさん見られる鮎喰川沿いを蛍の里として名称にも統一感をもたせた。

直接風景を楽しんでもらうため、見どころサインは位置サインのように説明は付記せず、ピクトグラムと神山フォント、英語表記を見やすく配置している。この案内板の近くを散策することで風景の素晴らしさや自然の心地良さを体で感じてもらうことを狙っている。(図-19) (図-20)



図-19 見どころサイン



図-20 すだちの里見どころサイン

#### (8)「メッセージサイン」制作

町の景観保護への協力や、神山町の良さを体感してもらうための散策などを呼びかける案内板をメッセージサインとして制作した。より神山町の良さについて知ってもらうためのお手伝いをしたい、その上で来訪者にも神山町の自然を守って欲しいと考えての提案である。町の生活が営まれる中心地である、寄井商店街、上角商店街での散策を呼びかけるメッセージ、徒歩での道のりが長い雨乞の滝や、焼山寺などの道中に目的地までの距離を添えた応援メッセージ



図-21 散策を呼びかけるメッセージサイン



図-22 応援メッセージサイン



図-23 景観保護メッセージサイン

や景観保護のため、ごみを捨てないで欲しいといったメッセージサインを提案した。特徴として、メッセージに地域の方言を使用し、それぞれに「さんぽしよる?」「あとちつと!」「ごみつまえて」など、方言を知らない人にも伝わる程度の方言を採用した。ごみ捨ての禁止など規制を伝える場合、抑圧的になりがちなサインを、町の人たちと話す中で感じた、『外の人を受け入れてくれる優しさや暖かさ』をもって伝えるメッセージにすることで、イラストとともに親しみやすさを表現した。(図-21)(図-22)(図-23)(図-24)



図-24 メッセージサイン

#### 4. プレゼンテーションに対する質疑応答

3.-4のプランを元にしたプレゼンテーションに対し、出席者より受けた質疑と意見に対し、以下に回答した。

Q1.我々は道に迷った時にまずは元来た道に戻ろうとする。道の駅を起点にしているのはわかりやすく評価できる。(神山町観光協会関係者)

A1.町外からの来訪者がサインを見る場合、方位を定めただけの地図は非常にわかり辛い。今回の提案の場合、神山町を南北で分断する国道が主要ルートでもあり、町の中心に認知度の高い道の駅があったこともこの手法を取る大きな理由となった。主要ルートである国道と起点を明記することによって効果的なマップが作成できたと考える。

Q2.何故サイン計画を提案したか?サイン計画である必要性があったか?(神山町に滞在中の武蔵野美術大学学生)

A2.都市部から離れた地域でありながら、レジデンスなど外部からの来訪者が多い神山町において、町のサイン計画は整備されておらず、環境を整える必要性があった。またサイ



ン計画を整備することで、現在神山町が持っている美しい環境を保持しつつ、神山町の活動をより効果的に知らしめることができるのではないかと考えたからである。

Q3.プレゼンテーションにおぶけた。(神山の方言で“驚いた”の意味)景観の中で目障りにもならないが、メッセージが伝わってくる。わくわくするような想いで聞いた。このプランを現実の案に取り入れていきたい。(グリーンバレー関係者)

A3.現在のプランをブラッシュアップすれば現実のプランに取り入れが可能と考える。是非検討頂きたい。

Q4.統一感を持ったデザインの必要性はわかるが、緑が豊かな土地の中で緑色は馴染み過ぎではないか？季節ごとの名所などでは色を使用しても良いのではないか？花が咲いていない時は黄色などの色の方が目立ち、花の里であることがPRできるという考え方はないか？場所ごとに色を変える、数カ所だけ意図的に変えるなどの方法もあっても良いのではないか？(神山町職員)

A4.今回6月のリサーチの中で、神山らしさを表現するプランが生まれた。緑豊かな土地であることはサイン自体のイメージからも伝えたい。緑の中で目立たないという視点は理解できるが、本プランの中では、「神山の美しい景観を崩さない、良さを活かす」ということが重要な課題であり、景観に馴染みつつもエレメントをしっかりと作り、機能性をもたせるサイン計画としている。美しい景観をアピールするため、サイン自体が悪目立ちしない、サインを含め景観自体を崩さないことを目指している。

## 5. まとめと今後の展開

現在、地域特性を反映するアートプロジェクト、デザインプロジェクトは多くの事例を見ることができる。ビジュアルデザインの分野の中でも地域のサイン計画はそこに生活する人々、また外部からの来訪者に対し、重要な情報伝達手法であり、単なる誘導や案内に留まらない広報媒体としての力を秘めている。

神山町においては、地域との密接な関係をもったKAIRの開催をはじめとするグリーンバレーの活発な活動や、お遍路や浄瑠璃など、歴史的背景に支えられた特有の人々の気質など、他の過疎地域にはない強い個性が存在する。そして

アート作品やアーティストとの交流によって、景観に対する高い認識を町民自身を持っていることも特筆すべき個性だが、この強い町の個性と魅力を外部からの来訪者に伝達するためのサイン計画については、ほぼ未着手であった。豊かな自然に恵まれた景観を崩すことのないよう、新しいサイン計画に対する慎重な姿勢があった可能性もあるが、今回のプロジェクトでは、これら神山町の個性を崩さず、「活かすこと」「魅力を伝えること」を重視したプランの提案を行った。

地域間の競争が激化する現在、地域の特徴を強く打ち出すことが求められがちである。しかし、サイン自体の機能や仕様を含めた意匠が突出することなく、同時に景観と調和し、その魅力を活かすデザインを提案することは容易ではない。今回の計画は、奇をてらう派手さはないものの、サイン計画の基本要素であるピクトグラム、マップ、フォント、イラストレーションのすべてにオリジナル制作のステップを踏んだ。それらの要素に適切に神山町の個性を取り入れ、一つ一つ積み上げることで、総合的にもたらされる効果を狙い、地域性の表現を試みている。

地域計画におけるサインは長く地域とともに共存し、必要があれば少しずつ変化していくものでもある。そのデザインには、デザイナーや設計者の個性だけではなく、地域、あるいは住民の個性こそが主役であるべきであろう。今回のプレゼンテーションにおいて、神山町の関係者に高い評価と支持を得たことは、何よりもこの提案が神山町の活動に寄り添い、発展する確かなプランの方向性と今後の可能性をもっていることを示している。

## 謝辞

本事業の実施にあたり、神山町民の皆様、グリーンバレーの皆様、神山町観光協会・神山町役場の皆様、2010KAIR参加作家であり本プロジェクトのコーディネーター廣田緑氏、愛知県立芸術大学名誉教授林英光氏のご協力を得ました。関係各位に感謝します。

## 参考文献

- 1) 竹田茂生「ニューツーリズムの現状と展望」2011年
- 2) 「in Kamiyama」webサイト

3) 山下里加「特集:地域と向きあうアート」雑誌「地域創造」

(財団法人地域創造発刊)2009年vol.25号掲載記事

4) 雑誌「Pen」2010年6/15号(No.269)

注釈

注1) 参考文献1).3のニューツーリズムの動向による

注2) 参考文献3)によれば、地域住民は自分たちの地域に残される作品に誇りと厳しい視点をち、アーティストのサポートにあたっている。

注3) 参考文献4) 特集「Q&Aで学ぶデザインの教科書」過疎の町の活性化に対するデザインの事例として「in Kamiyama」のwebサイトおよび活動が紹介された。